
正しい力の使い方

桃源世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい力の使い方

【Nコード】

N3317Z

【作者名】

桃源世界

【あらすじ】

兄は有名専門校の首席、妹は歌唱コンクール全国1位、両親は共に高名な家柄の出身。

そんな優秀な遺伝子を受け継いだはずの、神谷修平だが、一際目立つ所は一切ない。

3年前に設立された過去に類を見ない、いわゆる魔法と科学の混在した学園に入学するも、その人生はいつになったら報われるのか。

1話 プロローグ(前書き)

思いついたので書いてみました。

素人の書いた稚拙な文章ですが…

お読み頂けるのであれば、よろしくお願いします。
(・)(・)ペコリ

1話 プロローグ

俺、神谷修平かみたじゅうへいの送る人生の難易度はハードモードに違いない。そう確信したのは、小学生の頃だ。

父は有名会社の社長、母はその父に見定められた才色兼備の持ち主。

兄は世界屈指の文武両道者、現在は有名専攻学園の首席を維持している。

妹は母同様、才色兼備の性質を持ち合わせ、現在は歌唱コンクール全国1位の實力者だ。

遺伝子というものは働き者らしい、親の力を、確実に子に受け継がせている。

ただ、俺、神谷修平の遺伝子は怠け者なのだろう。優秀どころか、普通ですら片腹痛い。

容姿の方も、身長175センチ、体重62キロ、黒髪黒眼という大して特徴もない格好。

兄、妹のように一際目立った部分は、唯一つ存在しない。

優秀な家族の下に生まれてきた凡人を、蔑む視線が痛いのは否めない。

小学、中学と、陰口を叩かれなかった日はないだろう。

無論、それは中学最後の卒業式でも変わらなかった。

幾多の暴言を囁かれ、その度に己の無力感に蹲まっていた。

それは何処かで、俺が兄と妹に勝る部分はないという劣等感が悪い方向に堕ちた結果だ。

だが、今は違う。
空虚な人生を抜け、俺は兄と同じ土俵に立つことを決意した。
そうして受験した、兄が所属する学園。

エドウィン軍兵魔法科学専攻学園、総称名、G（軍式）M（魔法）K（科学）養成校。

地球が育つ過程の中で行われた暴挙に環境問題、その全てを解決するために3年前、この国にも設立された、今までに類を見ない教育機関だ。

この学園では、当時瓦解した最先端の魔法から、後世に受け継がれなかった科学の全てを結集させた様々な技術が眠っていると聞いている。

当時、自然災害で消滅した敷地を全面的に使用し設立されたため、勉強環境、運動環境、その全てが人工的な技術で造られたとも聞いている。

専門分野は、魔法を基盤に置き、科学の力を導入した、魔法科学（魔学）。

科学を基盤に置き、魔法の力を導入した、科学魔法（科法）。
そして、軍事全般を賄う軍事練兵（軍兵）の3つの班を主軸として置いている。

俺がその学園に入学できたのは奇跡といっても過言ではない。
定員数60名、入学希望者数は10倍の約600名、試験内容は基礎教科と実技だった。

兄に剣術を指導してもらうことができなかつたならば、落ちてい

ただろう。

経緯はどうあれ G M Kの入学式を終えた俺は、未来の学園生活に希望を抱いていた。

そして始まる、俺の人生観を180度は変えるであろう、その学園生活が。

* * *

「迷子になった…。」

G M Kが所有する、校舎と同時期に併設された寮、ゆめゆめ夢跡寮内。様々な設備に加え、総部屋数、三百は下らない。

中には光学螺旋レーザー室などといった、無駄に響きが男心をくすぐ擦る部屋も在る。

ただ、入念に戸締まりをされているせいか、中は覗けない。

入学式のパンフレットに挟まっていた情報によると、俺の部屋はZ 1という相部屋だ。

ぶつちやけてしまうと、かれこれ5分間は廊下を彷徨っているが、未だに辿り着かない。

広すぎる寮、移動に不便な気がしないでもない、というか不便だろう。

「設計ミスだろ明らかに…くそっ、建築会社の陰謀か…」

一度戻って、寮監にでも道を聞いた方が良いのだろうか、少し迷う。

方向音痴と笑われるのがオチか、入学早々災難すぎる。

「寮内の地図が配布されないのも問題だな…後で直訴するか…」

パンフレット片手に髪の毛を乱雑に掻きむしる。

困った時の癖だ、何度、家族と幼馴染に注意され続けてきたことか。

さて、どうしたもの…、

「コラアアアアアア！」

…！？

強烈な怒声が俺の耳を劈いた。

「いい加減に、その癖直しなさい！」

「っ、美咲か」

振り向き、彼女の顔を見た。

いましずみみん
今泉美咲、幼馴染の間柄にして、俺の知る世界では最強の女。

中学の頃は、女子バスケット部のキャプテン兼エースを務めていたと聞いている。

同学年ということもあったので、それなりに世話にはなつたし、世話もした。

俺より少し身長が低い、漆黒のセミショート。しなやかな足腰と、華奢な身体つきに、服の上からでも分かる包容力のありそうな胸、反則的な身体の持ち主だ。

「おじ様に言うわよ…？」

「悪いことは言わない、やめておけ。もとい、やめて下さい」

頭を下げる、土下座しても良い気分だ。

美咲は、ふふん、と意地の悪そうな視線で俺を見つめて来る。

今の場面を美咲に言われるとはツイていない、親父に漏れないことを切に祈る。

「というか、女子寮はこっちじゃないだろうが」

「ああ、迷ったのよ」

「さらりと言つなよ…」

既に開き直っているのだろう、苦悩している様子はなさそうだ。

「もう事務に聞こうかな、うん、そうしましょう」

そして勝手に自己解決するのは、幼少の頃から全然変わってない。

「ところで、修平の所属班ってG班よね」

美咲が指すG班というのは、軍事班のことだ。

ここでは魔法科学班はM班、科学魔法班はK班、軍事練兵班はG班と略されている。

「つか、俺の能力だとG班が限界だしな」

「なら、わたしと一緒にね！」

「お前が、G班…？」

瞠目する。

昔から体力に自信のある女ではあったが、こいつは何気に勉強もできる。

てつきり、M班かK班のどちらかだと勝手に解釈していた。

「な、何よ…わたしが、G班だといけないわけ…？」

「別に問題はないが、体力的に厳しいぞ」

「どの班だつて、厳しいのは変わらないわよ」
「「もつともで」

納得した、確かにその通りなのである。

「…アンタつて、ホントに鈍感よね。子どもの頃からだけど」
「なにがだ」

「何でもないわよ、修平のバカ！ おじ様にさっきのこと言いつけてやる！」

急に怒ったかと思いきや、美咲は俺の行き先とは逆方向に走り出す。

「あ、ちょっと待て、それはマジで洒落にならない！」

思い届かず、俺の大声を振り切つて美咲は去ってしまった。

……、携帯電話の電源をOFFにしておこつ。

2話 相部屋

人は予想だにしない事態に陥った時、総じて奇怪な行動を取ることが多いらしい。

無論、群集心理に長けた人物ならばその行動を回避することも容易ではあるが、生憎、落ちこぼれ代表の俺こと、神谷修平がそれを回避するのは不可能といっても過言ではない。

事件は、苦勞の末に見つけた自室前で起こる。

「開かないぞ、この扉…」

普通に手動で開けられるタイプのはずだ、押すと開けることが出来るはず。

ドアノブを回して押したり引いたりもしてみるが、動かない。

9

「鍵でもかかっているのか…?」

扉の隙間を見る。

見て分かったが、鍵はかかかっていないようだ。

故障しているわけでもないだろうし、何が原因なのか理解できない。

「くそっ」

ガチャガチャと音を立て、必死にドアノブに抵抗の意志を見せる。体重をかけて、押してみる。

「ふぬぬぬっ！」

動かない、どういうことだ。

実は何処かにICカードを挿す場所があり、それを見逃しているだけなのか。

だが、入学説明時に寮の話は出たが、扉には一切触れられていない。

部屋の内装こそパンフレットに書かれているが、扉の形状など書いてるはずもない。

「何を見逃して…、…！？」

その時だった、下腹を中心に強烈な何かが迫る。

「…ト、トイレ…！」

その正体は尿意、気付かなかった、そついや今日は1日中ずっと拘束されていたのだ。

入学式、説明会、そこから寮の説明会、そして数分以上の直進後、現在に至る。

迫る尿意、俺はトイレの居場所が寮内の何処にあるか、パンフレットを探る。

「部、部屋の中…だと…！？」

その事実にはパンフレットの寮内項目に、意気揚々と顔文字付きで書き記されていた。

“お風呂、トイレ、ロッカー、全て最新鋭の物を部屋の中に完備！

”（^。^）”

「Oh sit!」

ガチャガチャガチャ!

最早、形振り構^{なり}っていられる状況じゃない、険相な顔つきで救いを求める。

だが、扉は一向に開かない。

何か特殊な開け方でもあるのか、俺がそれを見逃しているだけなのか、しかし、パンフレットからその内容のみを探し出す猶予など、とうにない。

絶体絶命の状況下、俺は眼を見開いた。

「そうか、わかったぞ!」

謎は全て解けた。

俺は扉の前に正座し、お辞儀する。

「扉様、開けて下さい、お願いします!」

きつと、この扉は心を持っていないに違いない、俺はそう確信した。最新鋭の設備だ、こうやって部屋主にふさわしい人物なのかを見極めているに違いない。

部屋主として、扉に対して礼儀を保たなければ真の部屋主とは言えない、ということだ。

俺は一言、「勝った」、そう心の中で呟き、首を上げた。

.....。

「NOOOOOOOOOO!!」

ガチャガチャガチャガチャ!

俺がバカだった、扉に心があるわけがない、無駄な時間だった。

もう、尿意でどうにかなりそうだ、右脳と左脳が同時に思考停止寸前まで来ていた。

そこに、救世主が出現する。

「な、何してるの...お前...?」

長身痩躯の男、自然に揃った茶色の髪に、引き締った筋肉が体格を見栄えさせる。

鋭い顔が印象的だが、反対に、場所を問わず、自然に声をかけられそうな柔和な雰囲気も持ち合わせているような気がする。

「と、扉が...扉があ...!!」

「と、扉...? ちよい、貸してみろよ!」

一声かけられ、扉の前を占拠していた俺は、即座に避けた。

男が扉に力を入れて押すと、開かなかった扉に異変が起こる。

「お、おお...!!」

徐々に開き始める扉、男が更に体重をかけると、扉は完全に開いた。

「ふう…こんなところ…」

扉を開ける、ただ、それだけの行動で男2人は汗だくになった。部屋の中に入り、俺はトイレに繋がっている扉を反射的に開けた。ホテルにあるような、ユニットバスとトイレが一緒にあるタイプだ。

扉を閉めて、鍵を閉めると、俺は先ほどまでの苦勞を一気に解消する。

「い、生きてるって素晴らしい…！」

極限の状況までの我慢、そして解放。

誰もが一度は体験し、そしてこの感動を分かち合うことが出来るはず。

事を終え、部屋の中にいるもう1人の人物に話しかけた。

「サンキユ、助かった」

「おう、困った時はお互い様じゃねえか、お前がオレの同室者だろ？」

「ああ、多分そうだ。俺は、神谷修平、G班所属予定だ」

「オレは朝倉清二だ。M班所属予定、これからよろしくっ！」

握手を交わす、出会って間もないが気楽に付き合って行けそうな感覚がする。

俺たちは、暫しの間、荷物整理をしながら、置き場所などについて話し始める。

部屋の中は7、8畳程度の広さに、先ほど俺が入った浴室とトイレを足す程度だ。

片隅には、備え付けのロッカー、その反対側に二段ベッドが置い

である。それと、自分たちで置き場所を決めるとでも言わんばかりに、2つの机と椅子が適当に置かれていた。

「修平、上か下かどっちがいい？」

二段ベッドの場所割だろう、1度助けて貰った身分の俺は清二に選択権を譲る。

「俺はどっちでもいいよ、清二が選べよ」

「お、そうか。なら、オレは下がいいな」

そう言うのと、清二は圧縮されていたのであろう布団を取りだすと下に敷いた。

俺も、上の段に繋がる階段を利用して布団を敷いた。
だいたい荷物整理が付き始めると、お互いに楽な体制になる。

俺は上で布団に転がり、晋三は下で布団に転がった。

「さつきは本当に助かった。お前いい奴だな、清二」

「なに、どうってことねえよ。つか、あの扉クソ重いよな、どういう仕様だよ」

「だよな、押しても引いても開かないし、もうダメかと思った」

「後でオレ達の部屋だけなのか、事務に問い詰めてみようぜ」

「ああ、そうしよう」

俺たち2人は他愛もない会話を繰り返して続けた。

数十分後、2人一緒に示し合わせると、俺たちは部屋の鍵を閉め、夕食に向かった。

3話 学園の謎不思議

この学園には神秘的な力が備わっているらしい、勿論、ただの噂だ。

ある男は入学して、自分の中の力が覚醒したという。錯覚だ。

また、ある女は見たこともない希少生物に会ったという。幻覚だ。俺だって別に夢を見ないわけではない、火を操る力などを見たら興奮して一晩は眠れないだろう。しかし、入学しただけで力が芽生えるというのには、いささか無理がある。

美咲と再会した俺たち一行は、彼女に清二の自己紹介をした後、食堂に向かった。

そこで、配膳された食事を置いて、長テーブルの片隅に席を陣取った俺たち3人組の、夕食中に出て来た会話の内容である。

それは、清二の妄言から始まった。

入学式、暇な時間を持て余していた清二は体育館から何かを感じ取ったという話だ。

同様に、美咲もそれとは違う意味で妄言を発した。

入学式後に、外に出たと同時に草むらの影から顔を覗かせる希少生物に出会ったという。

「本当だった！ オレ、入学式の途中に自分の中の何かがこみ上げて来た気がしたし！」

それは凄いな、ぜひ、脳外科に診て貰うことをお勧めする。

「ホントよ！ わたし、学校から出た時にキリンぐらいに首の長い兔を見たわよ！」

驚きだ、近々、眼科に処方箋を受け取りに向かうといいぞ。

「修平はもうちつと夢を見るよ！　ここは魔法の存在する学園だぜ！」

「そうよ、アンタは現実的すぎよ！」

「いや、お前等の脳内がファンシー仕様なだけだろ……」

否定する俺、一向に意見を覆さない兩名。

平行線のまま進む議論を余所に、清二が唐突に問いかけた。

「そついや、今泉って同室者とかいねえのか？」

「ん、女子は1人部屋らしいわよ」

「へえ、そりゃ残念だったな。オレとか同室者がいなきゃ寂しくて死ぬぞ」

「アンタは兎か……！　まあ、確かにちよつと寂しいけどね」

そう言う美咲の顔は確かに、少し寂しげだった。

元々、今泉美咲という人物は1人っ子が故に、幼い頃は家の中だけでは寂しかったのか、ずっと俺たち3人兄妹と遊び続けていた。その度に、自分も兄妹が欲しい、アンタの妹をわたしに寄こしなさい、むしろアンタが弟になれ、とか無理難題なことを言われたものだ。

俺も会話の中に混ざる。

「俺は1人の方が気楽だと思うけど、まあ、美咲はそうだよな」

適当に会話の中に混じったつもりが、そこで俺、神谷修平は思わぬ地雷を踏む。

「…しゅ、修平…お前、オレとの同室が嫌なのか…!？」

「え、いや、別に違うけど」

「う、ううっ…気の合う同室者が出来て楽しかったのは、オレだけだったのか…!」

両目を片腕で覆うようにして、清二がすすり泣いた。

男泣きとは程遠い女泣きだ。

「あーあ……」

美咲は俺のせいだとしても言いたげに、軽蔑の視線を俺に向ける。いわゆるジト目だ。

俺はそれを怪訝な表情で返す。

「いや、その…ちょっと待て！ どんだけ精神が脆いんだよ！」

「泣かせたのはアンタでしょ？」

「普通泣かないよな!？」

「現実を見なさいよ、ほら、泣いてるじゃない」

「う…その、あ、いや、悪かった清二。お前との同室は嫌じゃないぞ、むしろ最高だ！」

身振り手振りで必死の弁解をする、自分で言ったことだが、気持ち悪い。

美咲の軽蔑の眼差しが一層、嫌悪感を帯びた。

「うわ、アンタそういう趣味なの…?」

否定したいところだが、今の台詞から否定できる自信がない。こうなったらヤケになるしかない。

「ほ、本当か…?」

「ああ、本当だとも!」

「じゃ、じゃあ…そのハンバーグ、くれるか…?」

「ああ、あげるとも!」

箸でハンバーグをひよいと摘み、清二の皿に移す。

「今日の一番風呂、オレに譲ってくれるか…?」

「あ、ああ! 譲るとも!」

「本当か、ラッキー!」

大袈裟に目から腕を離して子どものように純粋な笑顔で俺を見る清二。

しまった、騙された!

「いやあ、融通の利く同室者で助かるぜえ!」

「て、てめ…!」

「というか、騙されるアンタもアンタよね…!」

呆れ果てた美咲が1人先に食事を食べ終えた。

先に部屋に戻ってる、そう言い残して美咲は去って行った。

その後、俺たち2人も食事を終わると、2人して玄関の傍にある事務室に向かった。

窓口には優しそうなお姉さんが座っている。

ジャンケンでどちらが話かけるかを決める、威勢の良い掛け声と同時に、俺がグー、清二がパーを出した。負けた俺がすこすこ引

き下がり窓口に向かう。

「あの、すいません」

「あら、何かしら」

「その、部屋の扉が重いことについてなんですが…」

「ああ、それね。新入生は皆そう言うのよ」

皆…？ その言葉に引つ掛かりを覚えた俺は、窓口のお姉さんに質問する。

「あの、皆って…？」

「うちの学園はね、日常的にも鍛練を怠らないよう、さまざまな日用品に細工が施してあるの、ちなみに、貴方達の部屋にある扉の重さは150キロあるわ」

「ひゃ、150キロ!?!」

俺の背後で清二が驚愕の声をあげる。

俺も啞然とする、開けられなかった場合はどうしろというのか。

「でも、大丈夫。部屋には2人いるから、協力すれば、どうってことないわよ」

「あ…ありがとうございます」

窓口のお姉さんの励ましまがいのメッセージを受け取って、俺たちはその場を後にした。

そして再び、長い廊下を直進する。

ふと、清二がこんなことを言い出した。

もしかして、オレたちの部屋ってハズレ…？

部屋名番号、Z 1。廊下の一番奥にある部屋だ。
言わずもがな、ハズレに違いない。

「さ、最悪だ……」

「言うな、清二。それ以上は俺たちの心が持たない」

2人して慰め合いながら、俺たちは部屋の前までやって来た。

150キロある扉に、互いに感銘を受けた俺たちは、2人で一緒に扉を開いた。

清二は部屋に着き次第、風呂を沸かす作業に没頭し始めた。

俺はというと、やることもないのでOFFにしていた携帯を椅子の上でONにする。

綺麗な音を奏で、液晶画面がパツと光を放つ。そして、悲劇は起こった。

着信履歴 231件

「うおおおおおおおお！？」

「ど、どうした修平!？」

風呂場から聞こえる清二の声、返答をする暇もなく愕然とする。

衝撃的なハプニング、履歴を順になぞる、親父、親父、親父、親父、親父、親父……。

羅列する親父の文字の合間に、1つだけ妹の名があった、注意を

促そつと電話してくれたのだろう、しかし、時すでに遅し。

「美、美咲の奴…！」

何ということだ、触れてはいけない禁句に触れやがった。

妹と美咲、つまり俺たち3人の中の暗黙の了解の1つ、親父には触れるな、それを破るとは、よほど怒っていたのだろうか、いや、それにしても明日は大変だ。

俺の運命は決まってしまった、うつ伏せになり布団に潜る。

今日という日をなかつたことにしよう。

俺はこれから先に起こる未来を予想して眠りについた。

4話 異質な強者

この学園には、班ごとに《序列》が設けられているらしい。

1つの学年の定員数は60名、そこからM班、K班、G班と分かれることになる。つまり、一班20名になるということだ。

1位から20位までの序列が設けられ、上位毎に特典があるというのが、この学園の味とも言える部分だということを、俺は本日から知った。

噂では、各班の1位には学園長との交渉権限があり、学園の方針についても決められる権限の1つを持つことが出来るらしい。

当然、俺も序列を決める新人生試験という物に参加することが出来る。

同班にいる、美咲に勝てる自信は雀の涙ほどにもないが、少しは期待したい。

起床すると、携帯が目の前にあった。

開きっぱなしだったせいか、充電は切れているようだ。

「(あ…そうか、昨日は寝ちまったのか…)」

見れば、布団の上で携帯を開いていたはずなのに、いつのまにか布団がかかけられている。きつと、清一の奴が気を遣ったのだろう。

「おう、おはよう修平!」

当人は、既に着替えを済ませて椅子に座っていた。

この学園に制服という概念は存在せず、各々が自分勝手に私服を身につけられる方式だ。

清二の服は、英語のロゴが表示された白色の上着に、黒のジャケツトを羽織っている。下着は灰色と白の中間のような色をした無地のズボンだ。

「早いな」

「まさか！ 登校初日だからな、テンションが上がって早起きしただけさ」

ボクサーのように拳を前に繰り出しては引き戻す動作をおこなう。その動きを見て思う、相当強い。俺の目から見れば、1回1回の動作に無駄がない。

俺もベッドの上から降り、しわになった服を脱いで着替え始める。上着は無地の赤い長そで、そして白の長ズボンという至ってシンプルな格好だ。

着替え終わった後、清二が俺を見た。

「じゃあ、食堂に向かうか」

「ああ、行くこう」

150キロあるという扉を2人で開け、部屋を後にする。

食堂には昨日と同じ場所に美咲がいた、待っていてくれたのだろ
うか。

「よう、美咲」

「おっす、今泉！」

「あら、早いわね」

適当に言葉を交わし、席に着いた。
昨日と同じように他愛もない会話をする。

「2人とも聞いた？ 今日って、序列を決めるって話よね」

「ああ、俺は美咲と競い合うとか無理そうだし勘弁だな」

「んなこと言うなよ、修平、男魂を見せてやれ！」

「頑張りなさい、でも、勝ちを譲るつもりはないわよ」

美咲の言葉を聞いて周りの空気に気付いた。

不思議なことに、全員がピリピリしている気がする。

気持ちは全員、同じってことか…。

「あ、そうだ！」

突然、俺があげた声に美咲が反応した。

「どうしたのよ」

「美咲！ お前、親父に言いやがっただろ、着信履歴が231件も
きてたぞ！」

「あ……ごめん、忘れてた……」

美咲が申し訳なさそうに謝って来る、自分の愚かさに気付いたの
か珍しく頭を下げた。

「ははあ、昨日絶叫してたのは、そういうことか、そんなに親父さ
んって怖いのかよ」

「そりゃ……なあ……？」

「うん……ねえ……」

2人で勝手に納得する。

外野の清二は何のことか分からなさそうに首を傾げているが、知らない方が良くいこともある。

朝食を終えた俺たち3人は、そのまま学園に向かった。

エドウィン軍兵魔法科学専攻学園、広大な敷地を持つその学園には、大まかに分けて3つの建物が設置されている。

1つは、基本的に授業として使用する教室、模擬戦闘場、体育館、実験室等が設置された建物、ここで3年間同じ仲間たちと机を共にすることになる。

もう1つは、人工草原、人工山、人工森林などなど、人工的に造られた訓練をするための演習場とでも言う場所だが、相当広いというのが建物らしい。

後1つは、俺たち1年生にはまだ知らされていない。何に使うかわからないが、これも噂では1番の醍醐味といえる場所、らしい。

それはともかくとして、今日は初めての授業だ。

手に汗握り、教室を目指す。

「おっと、オレはここまでか」

清二が立ち止まる。

M班とG班は当然だが、教室が違う。

「じゃあ、見当を祈るぜ！ 2人とも！」

軍隊気どりの敬礼をかまし、清二は俺たちと分かれた。

美咲の方はというと、さっきのことを未だに気にしている。

「さっきはホントにごめんね！ 修平……殺されないよね……？」

「たかが頭を掻きむしっただけなのに、あながち否定できない自分が怖い…」

親父の畏怖ぶりは、子どもの頃からだ。

俺たちの中では最上級のトラウマを与えた存在に違いない、ただ、味方である以上は最強最高の味方なのだが、敵に回ると、この世でもっとも恐ろしい。

「ま、まあ…まずは試験だ。親父には…後で、超土下座でもしよう」

悩みをふっ切り、教室に入る。

俺たちを含めて、総勢20名しかいない教室に新入生同士の交流など微塵もない、あるのは敵視する視線だけ。

動揺する俺を横目に、既に順応したのか、美咲は平然と席が割り振られている紙に目を通すと、無言でその場まで歩いて座った。

俺も同じように、紙を見た。1番後ろらしい、席を目で確認する。

俺の席の横　異質な気配をした人物が居座っていた。

座席表を再確認する、そして俺の席の横の名前を見た。

鬼武晃、その男の名前が書かれていた。

真っ赤な赤髪、黒のタンクトップを着た異常な体格を持つ男。兄や清二ですら凌駕している筋肉、身長は180、いや、190はあるのではないだろうか。

かなり気が引けたが、座らないわけにはいかない。

席の前まで来る、俺に興味などなさそうに鬼武という男は前方の黒板を見据えていた。

いや、違う。黒板など見据えていない、鬼武が見ているのは。

「席に着けー！」

思考を遮り、教師であろう人物が部屋の外から入って来る。
俺も席に座ると、一通り、教師の話聞いた。

これから始まる新入生試験の内容についてだった。

教師が言うに、入学試験の成績を考慮した後、今回行われる新入生試験にて序列を決めると言う話だ、その試験の詳細について、教師が話す。

「新入生試験、今回の内容は、俺と戦うことだ。なに、どっち道、お前等に負ける俺じゃない、お前等の能力を順当に見定めて採点しよう。武器は何でも良い、何なら、銃でも持って数撃ちや当たるかもしれないぞ、ははっ！」

高笑いする教師、調子に乗りすぎている気がするが、負ける気はないのだろう。

見る限り、現役の軍人か何かではないのだろうか、まず、勝てる相手ではない。

「よし、では早速だが始めよう。場所はこの教室の横にある模擬戦闘場だ、呼ばれた奴から順に来い、まずは……1番、今泉美咲！」

「はい！」

美咲が席を立つ、そして、そのまま教師に付いて行った。

教室がざわめき始める、互いに敵視はしているものの、仲の良い連中も当然いる。各々が勝手な推測や意見を出し合っていた。

あんな体格してる奴に勝っていいのかよ……

無理だろ、今行ったの女の子だろ、大丈夫なのかよ

まさか、殺されないよな…？

ざわめき始める教室、確かに強そうだが、過剰すぎだな。

あの軍人も確かに強そうだったが、親父や、俺の横にいる鬼武ほどに異質な気配は放っていない、美咲にも充分勝てるチャンスはあるだろう。

5分後、美咲が戻って来る。

そのまま自分の席には戻らず、俺の席までやって来た。

「どうだった？」

「バッチリよ、何とか勝てたわ」

「…マジか」

「うん、さっきの挨拶もムカついたし…剣でねじ伏せてやったわ」

大番狂わせだ、手加減でもされたのだろうか。

いや、あのプライドの高そうな教師に限ってそれはないだろう、兄貴に指導を受けた賜物と、その体内に秘められた限りない運動能力が物を言ったのか。

事実、その次に呼ばれた、尾崎という男子は1分も立たずに死にそうな顔で帰って来た。

「次い！ 鬼武晃！」

美咲に負けたことがショックなのか、声を荒げて生徒の名前を呼ぶ教師。

無言でスツと立ち、鬼武は教室を後にした。

「美咲、試験場の中って教師と2人きりなのか？」

「いや、審判がいたわ。一応、公正な試合判断つてのが、あるようだし」

「なるほど、それは良かった。あんな教師と2人きりになんかなりたくない」

「同感ね」

呆れたように溜め息をついて、自分の試験が終わったことに安堵する美咲。

そのまま席に戻り、美咲は自分の所定位置に座った。

俺も、そろそろ呼ばれるだろう。

しかし、いつまでたっても俺の名前は呼ばれなかった。

10分、あるいは20分は経っただろうが、暇をしていると、鬼武が戻って来た。見るからに無傷だ、鬼武は無言のまま、席に座る。

そして、次の瞬間、20分ほど戻ってこなかった理由、扉の向こうから聞こえる声で、そのことは明らかになる。

来たか、担架！ こっちだああああアアア！

5話 新入生試験

圧倒。今、この場にはその一言がふさわしいのではないだろうか。担架で運ばれ去る教師、項垂れた手からは生気すら感じ取れない。元凶、鬼武晃はその間も終始廊下に目を向けることはなかった、今もなお、前方の一点を見つめている。

一見、黒板を見つめているだけに思えるかもしれないが、俺には分かる。

こいつは、最初からずっと美咲を敵視しているのだ。

圧倒的なまでの力を持った鬼武が唯一見定めた人物なのだろう、美咲から終始、目を離す様子を見せない。

何かあれば戦うことになるかもしれないが、俺にこいつを止められる自信はない。

何せ、教師1人を完膚なきまでに叩き潰した男なのだから。

担架で運ばれた教師を尻目に、結局、俺たちの試験はその後、代理人とやらがやって来て再開された。

向かった生徒たちが1分以内には帰って来る、やはり、美咲と鬼武が別格なのだ。

「次……ほう、神谷か」

代理人としてやってきた、女教師が玩具でも見るかのようにニヤリと笑う。

後ろで纏められた黒髪に、軍帽を被っており、体格は本当にこの教師かと疑うほどに細身だ。

「かみたに神谷公明の弟が入学する、とは聞いていたが…面白そうな逸材だな」

「…あまり期待しないで下さいね」

「自信がなさそうだな、なに、神谷からキサマのことは聞いている。心配するな」

そう言い、女教師は俺に背中を向けた。

模擬戦闘場に導かれ、俺は中に入った。

何も無い広大な空間の中に、片隅で審査員をやっていると思われる方がこちらにやって来た。

「武器をお選び下さい」

色々の種類がある。

模造剣、模造銃、模造弓……模造銃剣などといった類まである。

俺はとりあえず、兄とチャンバラしていた頃を思い出して木刀を手にした。

「木刀か、ふふっ…思い出すな、キサマの兄も新入生試験で、その武器を選択した」

「兄と戦ったことがあるんですか…?」

「ああ、私が相手したよ。無論、叩き伏せてやったがね」

……面白い。

あの万能者とも言える兄を打ち倒すほどの相手か、武者震いが止まらない。

木刀を目の前に構える、女教師の方は何も得物を取らなかった。

「…素手、ですか…?」

「教師が教え子に、それも新入生に武器など使う必要はない。」

女教師は俺の目の前で構えを取ることすらしない、どこまでナメているのか。

だが、俺は冷静だ。何事も感情的になつては相手の思うツボ、俺は審査員を見る。

静寂が場に広がる、ただ一点、互いに敵だけを見つめた。

「では……始め！」

審査員の開始宣言が為されたと同時に、俺は既に右足を踏み込み女教師に向かった。

フライング気味ではあったが、相手の意表をつき、打ち倒す。今の俺にはそれしか、この女教師に勝てる手段はないだろう。

「ずああああっ！」

渾身の一撃を頭上に振り下ろす。

「ふっ！」

受け流すように、女教師は木刀の当たらない、ぎりぎりの位置で真横に回避した。

軌道を修正し、今度は側面に振り切る。

「せやああああっ！」

「…そこっ！」

一瞬だった。

側面に叩きこまれるはずの攻撃を屈んで避けた女教師が、俺の軸足を一気に足払いする。

バランスを崩した俺の足が崩れ、身体は宙に浮いて落下する。

「（っ…まずっ…!）」

地面に背中をつき、受け身を取るも反動は避けられない。すぐにでも横に転がって逃げようと思ったが、遅すぎた。

「はあああっ！」

俺の顔面を潰すように、女教師の肘が鼻に当たる寸前で止まった。

「…っ…!？」

「勝負あり！」

審査員の声が、勝敗を明らかにする。

…完敗だ、強すぎだよ、この人。

「意表をついて来る作戦か、なかなか良かったぞ」

「あ、ありがとう、ございます…」

「ただ、まだまだ太刀筋が粗い。剣を振り切る時に迷いがあるな、精進しろ」

「…はい」

「返事が小さいな、もう一度だ…！」

「は、はいっ！」

「それで良い」

あまりの迫力に、おずおずと立ち上がり、模擬戦闘場を後にしようとする。

すると、後ろから女教師の声が聞こえて来た。

「神谷：いや、修平でいいな、修平！」

「はい！」

「私の名前は、赤澤あかさわ千秋ちあきだ。覚えとけ！」

「分かりました！」

「うむ、行っていいぞ！」

赤澤先生に終わりの合図を貰い、俺は教室に戻った。

美咲の席まで行き、結果を報告する。

「無理、強すぎ」

「まあ、修平だしね……」

予想していたとでも言うように美咲は失笑した、遣る瀬無い気持ちになる。

「でも、結構持った方よ。2、3分はそっちにいたし」

「いや、赤澤先生：女教師の人が、兄貴と知り合いだったから、その話をした」

「……ふーん、名前、教えて貰ったのね」

美咲の顔に殺気が帯びる、何か怖い。

「でも、公明さんのこと知ってたのね」

「ああ、兄貴が新入生の時、同じように試験をして叩き潰されたらしいぜ」

「あ、あの公明さんがやられたの……？ 驚きね……」

「俺も、親父の次にこの世で恐ろしい存在だと思ってたからな……ビツクリだ」

実際、あの兄が負ける姿など想像できない。

すかした顔で、全てを解決するような人間だ。そこには親父ですら一目置いている。

だが、赤澤先生の強さと速さを見たら納得物だ。

結局、美咲と鬼武以外に教師を倒すなどという偉業を達する者など他におらず、全員が1分以内に帰って来たのは、言うまでもない。赤澤先生が教卓につき、全員に話す。

「あー、上層部の会議で決まった結果だが、さっきのクズ教師の代わりに、これからは私がM班とG班を同時に兼任することになった。よろしく頼む」

同僚をクズ教師と呼び、嘲る赤澤先生。

だが、M班も兼任しているということは清二ともこれから戦うことになるのか。

「本来ならば、これからカリキュラムの発表をしたのだが…都合が狂ってな、本日は皆、帰っていいぞ。私はこれから、M班の連中を相手にしないといけないからな…」

…ご愁傷様、清二。

無事に帰ってこいよ。俺はただ、それだけを祈った。

5話 新入生試験（後書き）

ついつい1日で5話分投稿してしまった…。

これからは1〜2日の間に1話ずつあげて行きたいと思います。

ここまで読んで下さった方がいれば、改めてよろしくお願ひします。

6話 悪魔の電話

自然界には、天敵と呼ばれる畏怖の対象が存在する。

それ等は弱者を執拗に追い詰め、最後には骨の髄まで食い殺す。

あらゆる手段を行使して逃げようとも、その魔手から最終的に逃れられる手段は何一つ存在しない、それが凡人であれば、尚更だ。

寮に戻ると、俺は美咲と分かれて一目散に部屋に戻って行った。

人間、危機的状況に陥ると火事場の馬鹿力というものが働き、普段は不可能なことまで実現してしまうから怖い。

150キロもある部屋の扉を、俺は何の苦もなしに開け放った。

布団の上に置いてある、携帯に充電器を差して電源を起動する。

軽快な電子音が鳴り、液晶画面が昨夜のように表示された。

履歴の項目に移り、俺は、とある人の名前を押すと、携帯に耳を当てた。

1コールで、その人物に繋がった。

「もしもし」

『……、おう、修平』

「ご無沙汰しています、お父さん……」

『敬語など使うな、自然体で話すといい』

自然体で話せ、ということとは会社にいるのだから。

親父は会社では標準語、自宅では敬語で会話しろと命じている、そこに俺たち兄妹が逆らう権限はないし、我が家にとっては、これが普通なのだ。

「昨日は、その…ごめんなさい…」
『気にするな。俺も何かと心配性なものでな、ついつい電話しすぎた』

どうせ秘書にやらせたのだろう、涙目になりながら必死に電話をかける秘書の姿が目には浮かぶ、今度会ったら謝っておこう。

『……………』

電話の先からの沈黙、何か話せということか。

「母さんと、知香^{ちか}は元気にしてる？」

『ああ、元気だ。知香は先日も学校で褒められたと聞いている』

「会社の経営は順調？」

『おう、優秀な部下に恵まれたおかげか、さほど苦労はない』

「調子は、どうかかな？」

『……………おう、悪^{わる}かない』

「……………」

続かない会話、背筋に悪寒が生じる。

親子の会話という名目の中にある何かを、俺は掴み取れずにいた。この人が何のために、ただ、頭を掻きむしったという理由だけで電話をして来るとは思えない、何を俺に求めているのか。

『…美咲から母さんに連絡があつたぞ、まだ、あの癖を直してなかったのか』

「あ…ごめん。なかなか抜けなくて…」

『…まあいい、癖を直すのは難しいだろう。大目に見てやる』

「あ、ありがとう…」

かいま見える優しさからは、俺が恐れている怒気は感じ取れない。しかし、それは無情にも突然やって来た。

『…修平』

声色が変わった。

秘書が出て行ったのか、今、あちらには親父が1人で鎮座しているのだろう。

『俺の電話を無視するなど、随分と反抗的になったな』

「……ごめんなさい」

弁解など通用しないことはわかっている。

謝り続けるしかない。

優しい社長というのは建前、その男、神谷小次郎かみたに こじろうは気に入らない人間は全て暴力、権力、あらゆる力を行使してでも追いやる人間だ。それがたとえ、家族であろうと変わらない。

『お前の人生に介入するつもりはない。だがな、俺の子どもである以上…分かるな…？』

「っ…はい、わかっています」

息を呑む、神谷小次郎の子どもである以上、最終的な利益が何よりも優先される。

俺の才能がないことはどうでもいい、過程はどうあれ、結果を出せ、という話だ。

『おう、…長話も時間の無駄だろう。要件を伝える』

「はい」

『その学園に不信な噂が出回っている。何か、疑問を呈する点はあ

るか？」

「不信な噂、とは言われても元々、この学園には魔法などといった信じられない物まで存在しているのだ、これ以上不信な点といっても…。」

「！」

そこで思い出した、昨日の夕食時での会話、美咲と清二の妄言、そこに行き着いた。

清二は体育館で何かの力を感じ取り、美咲は首の長い兎を見たという。

『何か、分かったか』

「ただの他愛もない、噂だけだ」

『答える』

「友達が、体育館で何らかの力を感じ取ったとか、美咲も、首の長い兎を見た、とか…」

『……………』

電話の先で再び、親父は沈黙した。

何を考えているのだろうか、凡人の俺には到底わからない話なのだろう。

「あの…お父さん、一応、公明兄さんにも…」

『奴には、既に伝えた。今のところは、特にないらしい』

「そ、そうですか…」

兄貴ですら知らないとなると、やはり、俺では触れられもしない話題なのだろう。

『…、参考になった』

「あ、はい…」

『修平、これが最後だ』

「……はい」

『たとえば、ヤクザだろうがホームレスだろうが、親って奴には無償の愛がある。だがな、修平、これだけは覚えとけ。俺にそんな甘ったれた常識はない、理解しろ』

「わかりました…」

その言葉を最後に、親父は電話を切った。

胸に残る気持ちは、最悪、不快感、どついう言葉で取り繕っても嫌なイメージしか湧かない。これが、本当に親子の会話、親子の間にある情愛なのか。

ただ、失意の波に飲み込まれるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3317z/>

正しい力の使い方

2011年12月12日00時47分発行